

京型紙 —江戸後期～大正 デザインと技—展 出品目録

No.	タイトル	技法、特徴	解説
A-1	鯛の鯛(鯛中鯛)	突彫又は引彫、糸で補強 反故紙使用	魚の胸鰭の付根にあたる肩甲骨と鳥口骨が繋がった骨の形を模している。この骨が鯛の形に見えることから、江戸時代にはめでたい鯛の中にあるさらにめでたいものとして喜ばれ、縁起物であった。
A-2	罽尽し	錐彫、道具彫、縁場(枠外)に天保十巳亥(1839年)初春改近江屋重兵衛写の墨書	丸と木瓜の罽の中に富士に木立、菊、菊唐草、唐草、霞に鳥といった柄を入れている。
A-3	時計に色紙、巻紙	突彫又は引彫、中糸(格子)	色紙には「酒なくば何の未練か桜かな」、中の巻紙には「畑中に戻りよしのの柳かな」、もう一つ(扇形)には「桜さく何がふきても春は春」の三句。明治期の型と思われる。
A-4	小柄 田楽舞 地染	突彫又は引彫	鳴子を持って色々なポーズをとっている。
A-5	いろはかるた 地染	錐彫、道具彫	かるたの各々の文句は関西、とりわけ京都特有の文句に準拠しており、京都で製作されたか伊勢で彫られたとしても京都での使用を意図したと思われる。
A-6	方除猿 地染	錐彫、道具彫、反故紙使用	京都御所の北東隅、鬼門除けの猿の模様を散らしている。また、この猿は比叡山東麓、近江、坂本の日吉神社の使いでもある。
A-7	巻狩 地染	突彫又は引彫、縁場(外枠)にソスマ川の錐彫	騎馬でアヤイ笠を被った武者が矢をつがえ鹿を追っている勇敢な図柄だが、「馬」と「鹿」で「馬鹿」を暗喩する遊び心が感じられる作品である。
A-8	大津絵 地染	突彫又は引彫	近江大津の民画、大津絵の代表的な意匠である、鬼の念仏、瓢箪鯰、藤娘、釣鐘弁慶など10以上の意匠がある。
A-9	雀踊り 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	三人の意匠は北斎漫画の雀踊りのポーズや装束を写していると思われる。
A-10	ヨロケ菱に玉のりうさぎ 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
A-11	小紋陰日向、人物散らし	錐彫、道具彫	色紙のなかにシルエット、外に実物を並べて、鳥追い女、売茶翁、太夫(万歳)、傘張りなどがユーモラスに配されている。
A-12	毛槍尽し 地染	突彫又は引彫、反故紙使用 縁場に「す己半」の錐彫(中糸横)	大名行列の槍の様々な飾鞘を表している。
A-13	踊り アメノウズメ 地白	突彫又は引彫、中糸(横)	天の岩戸の前で踊るアメノウズメの色々なポーズを、縞の太細で表現している。
A-14	放屁合戦 地染	錐彫、道具彫、縁場(外枠)に錐彫で「す己半」	有名な河鍋暁斎の放屁合戦の絵を連想させる滑稽な意匠。冠を被った神官、数珠を持った僧侶が、おならをしている。
A-15	大津絵	突彫又は引彫、糸で補強	モチーフはA-8と同一だが、それぞれの表情や細部を詳細に表現している。
A-16	日露戦争	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	戦争柄は戦時中の着物に頻りに用いられた。煙を上げ沈みつつある船、破壊された大砲には旗竿の折れたロシア海軍の軍艦旗がつき、正常な船、大砲には朝日旗がついている。

A-17	職人尽し	錐彫、道具彫	10 以上もの職人が描かれている。「畳」「刺繍」「桶」「鍛冶屋」「刀研ぎ」「籠編」「傘張り」「糸練り」「弓張り」「織り」「大工」など
A-18	雪だるま(?)に犬 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	柄のユニークさでは出展作品中の白眉。雪だるま(?)に集う犬は円山応挙や神坂雪佳を思わせる。
A-19	うさぎ格子 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	上下互い違いに正面を向いた兎がデザインされている。杵を横段に、長くのびた耳を縦縞として格子を構成している。
A-20	大名行列	錐彫、道具彫	御槍持など、ほぼ大名行列の順序で柄が構成されている。
A-21	狐の嫁入り	錐彫、道具彫	天気雨のことを「狐の嫁入り」というが、もう一つの意に「夜、山野で狐火が連なって、嫁入り行列の提灯のように見えるもの」がある。本作品はそれを絵に表している。
B-1	葵の丸 <small>しょうぶがわ</small> 菖蒲章	突彫又は引彫、糸で補強	菖蒲は尚武に通じており、葵の柄と組み合わせている。葵の丸も徳川、松平の二武家を連想させ、全体を尚武文様でまとめている。
B-2	水玉散らし 地染	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	大小の泡がランダムな動きを見せている。水にまつわる文様は古くから日本の意匠の得意なテーマであり、型紙にも数多くの水玉文様がある。
B-3	破れ格子に毬 地白	突彫又は引彫、錐彫、中糸(格子)、縁場(外枠)に朱印	
B-4	昼夜縞取瓢箪 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	瓢箪と葉は古くからあるモチーフであるが、このようなモダンな瓢箪柄は明治期～大正期にかけて好まれたようである。明治期の図案集『美術海』『新美術海』にも似たものが見られ、京型紙は当時、京都で数多く発刊された図案集を参照した可能性が高い。
B-5	流水に石蓀 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	地流水を背景に、葉の中に水玉をつめた石蓀を散らしている。葉脈も太くデフォルメした大胆な意匠である。
B-6	正羽取、楓詰	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	19 世紀後半、型紙はジャポニスムの流行を背景に欧州へ渡った。20 世紀初頭のウィーン工房も型紙の影響を受けた作品を数多く製作したことで知られるが、本型紙も同工房の木版プリント作品にも似た素朴な柄である。
B-7	波に菊花散らし 地染	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
B-8	亀甲つなぎに牡丹 地白	突彫又は引彫、錐彫	繋いだ亀甲の余白に中太線で牡丹柄をいれている。文様自体は曲線を多用しているが、画面全体では幾何学文様であり、1920 年代に欧州を中心に興った美術運動、アール・デコのテイストがみえる。
B-9	斜輪つなぎ	錐彫、道具彫	錐彫と道具彫の柄を背景に、輪つなぎを浮き立たせているモダンな柄。
B-10	陰日向千成瓢箪 斜市松	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
B-11	縞取輪つなぎ 地白	突彫、中糸(斜格子)	
B-12	小紋蝶詰	道具彫、縁場(外枠)に田と梅の錐彫	

B-13	芽柳変わり立涌	突彫又は引彫、中糸（横）	流麗な植物文様は 19 世紀末に欧州を中心に開花した美術運動、アール・ヌーヴォーを象徴するモチーフ。本型紙はアール・ヌーヴォーの影響を感じさせる興味深い作品。
B-14	水紋詰 地白		水紋を絞り風に表現した大胆な作品。
B-15	縞に市松小柄・蜻蛉（とんぼ）飛 地白	突彫又は引彫、中糸（斜格子）	
B-16	重ね菱取り方に割付詰	突彫又は引彫	
B-17	巻き上げ絞り散し	錐彫、突彫又は引彫	光る星にもみえるデザインを大小の巻き上げ絞り・唄絞り風に表現している。
B-18	横縞に縦縞ひょうたん 地白	突彫又は引彫、中糸（斜格子）	幾何学模様のように縦横の線のみで構成された柄は伊藤若冲を想起させると同時に、ポップな印象も与える。
B-19	小柄 昼夜松	突彫又は引彫、道具彫	小柄松詰めと同じく陰と日向の松を表現している。おくり（繰り返し）の同じ場所の形が少しずつ違うため、少なくとも日向の松は道具彫ではないようである。
B-20	小柄 松詰	錐彫	大小二つの大きさの錐で陰と日向のような効果を出している。
B-21	松詰	突彫又は引彫、中糸（斜格子）	
B-22	二本通し棕櫚 地白	突彫又は引彫、中糸（斜格子）	今回出展の型紙のなかでも大柄の部類。1 本の棕櫚（シユロ）を大胆にデザインしたモダンな作品。
B-23	縦流水縞	突彫又は引彫、中糸（斜格子）	
B-24	斑入り地にひょうたん 地白	突彫又は引彫、中糸（斜格子）	
C-1	斜め取り、縞に蜻蛉 地白	突彫又は引彫、中糸（格子）、縁場（外枠）に日野屋幸八の墨書	角度を変えた強弱をつけた斜めの線で、雨、風を表現し、そのなかに動きのある蜻蛉を散らしている。
C-2	縞地紙にかすみ松 地白	突彫又は引彫、中糸（格子、斜格子）	縞の太細のみで地紙。枝松を表現し、地落の枝松・かすみとの組み合わせでさらに画面に強弱をつけている。
C-3	毬に蝶、藤 地染	突彫又は引彫	
C-4	ヨロケ流水縞に波頭	突彫又は引彫、中糸（格子）、縁場（外枠）に絳喜の角判およびキ、◎の墨書き	
C-5	立涌取、木賊 地白	突彫又は引彫、中糸（斜格子）、「の印」の楕円の判	縞にとり太細で強弱をつけた木賊で立涌を表現している。
C-6	縞柳、地落ち雨傘に燕 地白	突彫又は引彫、中糸（横）、縁場（外枠）に中村屋仕入の角判	雨に見立てた細縞に伸びのある柳の枝を配する。燕と傘を縞の太細で表現し、さらに傘の中に地落で燕を入れた凝った意匠。
C-7	楓に雀 地染	突彫又は引彫、縁場（外枠）にす〇半の錐彫、反故紙使用	楓は一つ、雀は三つの意匠を用い、それらを上手く組み合わせる動きのある表情豊かなものに仕上げている。柄を補強すべく糸が入っているが、中糸ではなく、柄の弱い部分に合わせて一つずつ縫っているようである。
C-8	ススキに雁 地白	突彫又は引彫	一面のススキのなかに柄の縁をギザギザにした雁の影を散らし、そのなかに飛ぶ雁を配している。
C-9	横枝 桜に燕	突彫又は引彫、道具彫、糸かけで補強、縁場（外枠）に錐彫で「す巳半」	
C-10	小柄 牡丹にクモの巣 地白	突彫又は引彫、中糸（斜格子）	

C-11	行儀小紋 陰雁	錐彫で「す巳半」	行儀小紋を大小二種類の錐で彫り、雁をシルエットで浮かびあがらせている。
C-12	総詰芙蓉 地白	突彫又は引彫	
D-1	小紋通しにこうもり	錐彫、突彫又は引彫	通し小紋に蝙蝠を飛ばしている。
D-2	小紋通しにエビ	錐彫、突彫又は引彫	D-1と同じく、通し小紋のなかにエビをとばしており、錐の大きさも同じ。
D-3	歌舞伎柄	錐彫	
D-4	小紋通しに鶴	錐彫、突彫又は引彫	通し柄小紋のなかに柄（鶴）をとばすというD-1、D-2と同じパターンであるが、錐彫の間隔が違うのでやや雑な印象をうける。
E-1	小紋魚詰	錐彫、道具彫、縁場（外枠）に半の錐彫と細工人駒キチ 拾三才 午八月 出来 松田中政言写の墨書、反故紙使用	彫職人の名前、年齢が判明した稀な例。魚の緻密な柄を丁寧に彫り出している。
E-2	小紋亀	錐彫	二種類の錐を使って大小五つの大きさの亀を彫っている。尾に海藻などが蓑のように付いた蓑亀は長寿のしるしとされ、吉祥文様によく見られる柄である。
E-3	変わり市松に雨竜 地白	突彫又は引彫、道具彫	
E-4	一寸法師 地染	突彫又は引彫、道具彫	市女笠、打出の小槌、紅葉の柄より、一寸法師を表していることがわかる。
E-5	三番叟に若松 地染	錐彫、道具彫、反故紙使用	祝いの舞である三番叟は、能の「翁」で千歳、翁に次いで3番目にでる老人の舞。烏帽子を被り、扇を持って舞う図柄を根引きの松とともに図案にしている。
E-6	こうもりに宝珠 地染	突彫又は引彫 糸で補強、反故紙使用	中国では「蝙蝠」が「福」の音に通じることから吉祥柄として用いられ、日本でも同意として広まった。宝珠（如意宝珠）も宝尽しの代表柄の一つ。かぎ状の蝙蝠と円形の宝珠を対比させ、全体に抑揚をつけている。
E-7	おいらん	道具彫、糸で補強、縁場（外枠）に「す巳半」の錐彫、反故紙使用	
E-8	小紋格子小花に丸	道具彫、縁場（枠外）に弘化四年（1847年）丁未 六月 御城前近江屋重兵衛写の墨書	花菱にも見える四弁の花と丸の中に四つの点を入れた柄を交互に繋いで全体を構成している。江戸期には二条城大手門前、二条堀川周辺の地域を墨書にある御城前と呼んでいたようである。
E-9	小紋雪輪	錐彫	雪輪の周囲を地落にし、その周囲も同じ大きさの錐彫で雪輪の柄を浮かせている。
E-10	小紋忠臣蔵	錐彫	「忠」「義士」の字と討入りの「大石」「原」「勝田」ら義士の名字を全体に詰めて小紋にしている。
E-11	五月尚武柄 地染	錐彫、道具彫、縁場（外枠）に「す巳半」の錐彫、反故紙使用	烏帽子、兜、鎧櫃、菖蒲を配し、菖蒲＝尚武文様を表している。
E-12	小紋七宝葉花びら詰	錐彫	細かさでは出展作品中、随一であり、七宝は花びら（桜）と葉（笹）で構成されていると思われる。
E-13	小紋面尽くし（嵯峨面）	突彫又は引彫、錐彫	天狗、般若、お多福、狐、猿など14種の面がある。能面には見られない、ひょっとこ、お多福などがあることから、京都嵯峨釈迦堂の民芸品である嵯峨面を題材にしている可能性が高い。
E-14	茶道具尽くし 地染	道具彫、縁場（外枠）に「す巳半」の錐彫	茶碗、茶杓、茶入、棗、五徳、茶筌、柄杓、水差、羽箒、鍋敷き、火箸、建水、帛紗、茶きんと、茶道の小道具がほぼ網羅されている。

E-15	ヨロケ縞に枝鉄線 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)、縁場に「日野屋幸八」墨書と㊦朱印	滝の表現にも思える縞の中の枝楓は初夏の青楓を表している様に見える。
E-16	小格子に萩 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
E-17	小紋麻の葉に向かい鶴菱	錐彫	菱の中は唐草模様のようにもペーザリーのようにも見えるが、詳細に見ると、向かい鶴菱の紋を錐彫で緻密に彫っている。菱と菱との間の地落の表現といい、実に細密な表現である。
E-18	小牡丹詰に羊歯(しだ)飛 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	牡丹の花びらで全体の画面を構成しているが、細い線を残して彫る技術は卓越している。
E-19	小柄 萩詰 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
E-20	小紋地アラレに流水	錐彫	
E-21	松林 地染	錐彫、道具彫	松原、または松林と称する図柄は型紙によく見られるが、本型紙は細工の繊細さに驚かされる。
F-1	銀杏に丁子 地白	突彫又は引彫、縁場(枠外)に田川の墨書。角判、勢州、白子	
F-2	縞に変わり扇、胡蝶 地白	引彫、中糸(斜格子)、縁場(外枠)に日野幸の墨書	縞に半開き扇を合わせて蝶に見立てている。紋に扇蝶、浮線扇があるが、それと同様の発想と思われる。
F-3	鯉の滝登り 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	小さく様式化した滝と鯉を一对とし、全体に詰めて画面を構成している。線の太さをおおよそ統一しているところに、素朴さや可愛らしさを感じられる。
F-4	数珠縞に菖蒲 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
F-5	昼夜蝙蝠 地白	突彫又は引彫、中糸(格子)	
F-6	ヨロケ縞取、蕨に蝶 地白	突彫、中糸(斜格子)、縁場(外枠)に日の幸の墨書	よろけ縞を蕨に見立て穂先を入れている。その中に影のようにぼかした蝶を配する。恣意的にも見えるこの意匠は、一方で型紙としての強度を保持する工夫がなされており、この発想はC-8と共通している。
F-7	かすみ満月にすすき 地白	突彫又は引彫、中糸(縦と斜格子)	
F-8	ヨロケ縞雁金に撫子 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
F-9	ヨロケ縞に流水、梅、楓 地白	突彫、中糸(横)、縁場(外枠)に朱の角判、南埼玉、須賀村、紺善	よろけ縞に流水、楓と梅、桜、菊を散らし、その中に千鳥、橋、木立に鳥(雁)、木立に高樓を配し、様々な季節を表している。
F-10	横段取方梅花藻 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
F-11	縞小枝に燕 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	画面のほとんどを地白とし、柳にもみえる縦縞、つぼみをつけた小枝を背景に、変化に富んだ形の燕が飛んでいる。燕の中も地白(地落)とし、網目、斜格子に青海波、縦にとった波(滝?)、すすきなど、夏向きの柄を入れている。
F-12	縞に斜枝 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	全体に強弱をつけた縞に、豆か萩の類の枝葉を斜めに配している。
F-13	ヨロケ縞に枝鉄線 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)、縁場に「日野屋」の墨書	ヨロケ縞の中に鉄線のつるを入れ、葉を散して画面を構成している。
F-14	七宝華紋に露芝雁金 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	雲または霞に見立てた七宝(持合七宝?)と華紋の間に群れ飛ぶ雁と露芝または、すすきを配している。

F-15	ヨロケ縞に蒔(ふき) 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)、縁場に「日野屋幸八」墨書と㊦朱印	ヨロケの縞で地に変化と強度をもたせ、柄として蒔(?)を配している。
F-16	影日向千鳥詰に蝶 地白	突彫又は引彫、縁場に「宗」「八」の墨書	地を千鳥の柄にし、蝶の中にも青海波を入れるなど夏を意識した柄の構成になっている。
F-17	縞につた 地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	縞は各々に太いところを作り、その集合で影を表現している。また、つたはその外周をギザギザに彫り、なかかも一目絞り風にして、全体に絞り風に見せている。
F-18	破れ分銅菱に萩 鉄線地白	突彫又は引彫、中糸(斜格子)	
G-1	小紋唐花	道具彫	柄は蔓、花菱の類を簡略化したように見える。今回出展の型紙在銘のなかでは最古の年号、「文化十(1813年)酉霜月改松葉屋」および「新〇〇播磨屋卯ノ助」の墨書がある。
G-2	小紋割り付け柄	錐彫、道具彫 (銘) 雲州松江 大山屋良七様 御誂形 細工人 徳治郎の墨書	縁場に書かれた銘で出来上がりの行き先、彫人まで判別出来る稀な例。

三好染工について

三好染工株式会社は京都の中心、御城前(二条城東側あたり)、小川通り御池上るの地に小紋染を業として江戸後期に創業しました。

小川通りの名の通り、かつて川が流れ、良質の水が得られたこの地には、上流にお茶のお家元、下流には江戸期より「染」を生業とする家が多々ありました。

その中で弊社は明治期の家業中断を経て、大正期に祖父が再興し、型染を中心として手描き友禅、蠟纈、絞り等、多様な技法を取り入れた染色をおこない、今にいたっています。

三好染工株式会社・三好拓夫

京都市中京区小川通押小路下る下古城町 376

Tel:075-221-2856 Fax:075-221-6247

E-mail:kyo-ogawa-miyoshi@theia.ocn.ne.jp

URL:http://www.kyoto-miyoshi.com